Who's who 卒業

アンブレラ

東田 稔 63歳

雨をしのぐためだけなら百円でビニール傘が手に入る。そんな時代に、高価なオーダー傘をつくる意味って、何ですか？

オーダーメイドの傘の注文を受けている、ムーンバット株式会社の洋傘事業部、大原孝二部長は、一本のオーダー傘を開いてみるよう、すすめてくれる。バチッ、と快い音が響き、重く確かな手ごたえとともに、傘がすっと開ききる。

「高級車は、ドアを開閉するときの、音や手ごたえが違うでしょう？　傘も同じです」

開閉のときに活躍する金具は、ハジキと呼ばれる。高級車のドアを開けるときに覚える官能的な快感が、ハジキが鳴る瞬間に、たしかに走る。

さらに、いい傘は、雨を受けるときに、雨粒の音がするという。雨の日に〈高級車でプライベート音楽会（笑）〉できるオーダー傘は、ムーンバット専属の傘職人が、手作業でつくる。大原部長が絶大なる信頼を寄せる熟練職人の一人が、ほかならぬ、東田稔さんである。

「雨がこの世に降らなくなることはなかろう、ならば、傘もなくならんやろう」と東田さんが洋傘の仕事にとびこんだのが、18歳のとき。当時百人ほどいた京都の傘職人から「オヤジさん」と呼ばれていた親方のもとに住み込み、修業を積む。10年後、独立し、修業時代に出会った奥様の敏子さん（63）と共に、傘づくり一筋に生きる。

「大原さんが〈できあがりはこういう感じ〉と言うてデザインのアイディアをもってくるんですわ。作り方は言ってくれまへん。それを、じゃあ、いかに傘にするか？と考えながら、そのときそのときに応じたものをつくるのが、わたしの仕事ですわ」と東田さん。

大原部長と東田さんのご関係は、編集者と作家のようなものでしょうか？「こんなの書いて」と注文する編集者と、「じゃあ、どう文章にするか？」と考える作家の図、みたいな？

「それはようわかりませんが、ときどき無理難題、言うてきますわ（笑）。いちばんしんどかったのは、〈一枚張りの傘〉をつくれ、言われたときかな。ふつうは、木型に沿って裁断した二等辺三角形の生地を縫い合わせて、大きなクロスをつくってから骨に縫い付けていくんですよ。でもそのときは、生地を裁断せずに一枚の布でやれ、と」

東田さん「ふつうは……」なんてさらっと言ってますが、仕事場の壁に無数に並ぶその木型じたい、実はすべて、東田さんの手作りなのである。傘のフォルムばかりか、生地の性質や色に合わせて、一本一本、異なる木型が使われる。木型には、無数の鉛筆書きのメモ。「同じ生地でも、濃い色のほうが、伸びにくい。作りながら気づいたそんなことを、書いとくんですわ」

生地をそうやって「読む」経験を積んできたからこそ「この生地は髪の毛一本分、木型の外側を切る」なんて判断が下せる。髪の毛一本分が、〈雨粒の音楽〉をよりリズミカルにする〈張り〉の違いとなって現れる。

「〈裏つきの、二重張りの傘〉をつくれ、言われたときもきつかったな。なんとか、やりましたけど（笑）」無理難題をふっかけ続ける大原孝二と、その期待に確実に応えていく東田稔。

そのふたりのコラボレーションが、ついに、傑作を生み出す。

カナダのアーティストがデザインした、貝殻がモチーフの「パラシェル」である。非対称のフォルムを見た当初、東田さんは「ムリや、できるわけ、あらへん」と言った。しかし大原部長は、東田さんならできる、と信頼する。「しゃあないので」東田さんは、試行錯誤を繰り返し、ついに完成。力作は2005年から商品化されている。

東田さんは、振り返る。「パラシェルはほんとうにたいへんやった。奇跡的にあれができたのは、〈一枚張り〉やの、〈二重張り〉やの、むずかしい注文をこなしてきたからこそ、やな。あの経験が生きていたからこそ、パラシェルができた」

一本一本、わがままな注文に完璧に応じていくことにより、東田さんも着実に腕を上げてきたわけである。傘をオーダーすることは、そんなスーパー傘職人を（僭越ながら）育てることにもつながっているのかな……とふと思えることもまた、オーダー傘が与えてくれる幸福のひとつかもしれません。■

中野香織＝文
text:Kaori Nakano
福知彰子＝写真
photographer:Akiko Fukuchi

HANWAY
〒106-0032
東京都港区六本木6-10-1　六本木ヒルズ ウェストウォーク4F
Tel：03-5786-9600　www.hanway.jp